AgileWorks R3

動作環境とモジュール構成

R3.3 第 1 版(2026/07/15)

ATLED

目次／索引

1. サーバー動作環境 4
2. クライアント動作環境 6
2.1. クライアント動作環境（ユーザーサイト） 6
2.2. クライアント動作環境（管理サイト） 7
X-WebForm について 7
FlowEditor について 7
3. Java に関する注意事項 10
3.1. FlowEditor が起動できない 10
3.2. JavaWebStart 版 FlowEditor の起動時に警告メッセージが表示される 11
4. AgileWorks モジュール構成 12
4.1. 構成の概要 12
5. PDF ビューアの設定 13
5.1. Firefox の PDF ビューアを Adobe Reader に変更する方法 13
5.2. Google Chrome の PDF ビューアを Adobe Reader に変更する方法 14
5.2.1. Adobe Reader Chrome アドオンを利用する方法 14
5.2.2. Adobe Reader を既定のアプリとして PDF を表示する 14
5.3. Microsoft Edge の PDF ビューア表示における注意点 15

◆ 改版履歴

版数	年月日	改版内容
第 1 版	2026 年 07 月 15 日	第 1 版作成

1. サーバー動作環境

OS やミドルウェアなどの対応環境は、ハードウェア／ソフトウェアメーカーの新製品発売やバージョンアップに伴い、予告なく変更される可能性があります。本書の内容は、本書リリース日時点の対応環境となっております。
最新の情報は「サーバー動作環境」よりご確認ください。

項目	バージョン／スペック
対応 OS	■Amazon Linux 2023 ■Red Hat Enterprise Linux 10 ■Red Hat Enterprise Linux 9 ■Red Hat Enterprise Linux 8 ■Red Hat Enterprise Linux 7 ■Microsoft Windows Server 2025 ■Microsoft Windows Server 2022 ■Microsoft Windows Server 2019 ■Microsoft Windows Server 2016 ■Microsoft Windows Server 2012 R2 ■Microsoft Windows Server 2012 ※64bitOS のみ利用可能
Web サーバー	■Apache HTTP Server 2.4.xx 対応 Apache HTTP Server 2.4.27 以上
JDK	Oracle 社提供 OracleJDK 1.8 の update60 以降 RedHat 社提供 OpenJDK 1.8 の update60 以降 Bellsoft 社提供 Liberica JDK 8 ※AP サーバーの OS に対応しているバージョンを採用してください。
AP サーバー	Apache Tomcat 9.0.x 対応 Java SE は JDK8 (Update 60 以上) ※AP サーバーのクラスタ機能について Tomcat のクラスタ機能を利用した構成はサポート対象外です。 クラスタリング時は外部ロードバランサー側による負荷分散とセッション維持の設定で動かしてください。
DB サーバー	■Oracle Database Server 26ai ■Oracle Database Server 19c ■Microsoft SQL Server 2025 ■Microsoft SQL Server 2022 ■Microsoft SQL Server 2019 ■Microsoft SQL Server 2017 ■Microsoft SQL Server 2016 ■PostgreSQL 15.x (パッケージ版) ■MySQL 8.4.x ■MySQL 8.0.x ※データベースの文字コードは UTF-8 のみサポート対象です。 ※データベースを稼働可能な OS は各データベースの仕様をご確認ください。 MySQL 8.0 は Windows Server 2012 では利用できません。 Oracle Database Server 19c は Amazon Linux 2023 では利用できません。 Oracle Database Server 26ai は Amazon Linux 2023, RHEL10 では利用できません。
ジョブマネージャサーバー メールサービスサーバー ASB サーバー	稼働させるサーバーの OS は AP サーバーと同じ OS を採用してください。 AP サーバーと同居する場合、AP サーバーが利用する JDK を利用します。 AP サーバーと同居しない場合、AP サーバーが利用している JDK と同じバージョンの JDK をインストールする必要があります。 下記構成の場合、外部ジョブマネージャ、外部メールサービス、ASB は AP サーバーに同居する必要があります。 ・サーバーOS : Microsoft Windows Server ・DB サーバー : MySQL
OS 言語設定	日本語のみ動作保証 ▼ Linux の場合 LANG=”ja_JP.UTF8” ▼ Windows の場合 [コントロールパネル] – [地域と言語のオプション]から形式を日本語にする必要があります。 上記の設定に加えて OS のシステム環境変数に以下の Java の起動オプションを

	指定してください。 ・変数名：_JAVA_OPTIONS ・　　値：-Duser.language=ja -Duser.region=JP
タイムゾーン	日本のみ動作保証

2. クライアント動作環境

OS やブラウザなどの対応環境は、ハードウェア／ソフトウェアメーカーの新製品発売やバージョンアップに伴い、予告なく変更される可能性があります。本書の内容は、本書リリース日時点の対応環境となっております。
最新の情報は動作環境一覧よりご確認ください。

- パッケージ版
- クラウド版

2.1. クライアント動作環境（ユーザーサイト）

項目	バージョン／スペック
対応 OS	・Microsoft Windows 11 ・MacOS ・iOS 16, 17, 18, 26 ・iPadOS 16, 17, 18, 26 ・Android
対応 Web ブラウザ	＜Windows OS＞ ・Mozilla Firefox ・Google Chrome ・Microsoft Edge（Chromium ベース） ※IE モードは非対応となります ＜MacOS＞ ・Chrome ・Microsoft Edge（Chromium ベース） ＜iOS／iPadOS＞ ・Mobile Safari ＜Android＞ ・Google Chrome
Web ブラウザの設定	＜必須要件-共通＞ ・JavaScript の有効化 ・Cookie の許可 ・インラインフレーム（IFrame）の許可 ・ダウンロードの有効化 ＜ポップアップブロック＞ AgileWorks では書類表示等でポップアップ表示している箇所がありますので、もし、ブラウザや検索ツールバー、セキュリティソフト設定などによってポップアップがブロックされる場合は、ポップアップブロック設定を無効としてください。 ＜JavaScript ブロック＞ セキュリティソフトやツールバーの設定によっては JavaScript をブロックする制限を行う場合がありますので、該当制限を解除してください。
対応 PDF ビューア	・Adobe Reader ※ Firefox や Google Chrome では PDF ビューアが内蔵されていますが、ブラウザに内蔵の PDF ビューアでの「表示」や「印刷」は動作保証対象外です。「PDF ビューアの設定」を参考に Adobe Reader をデフォルトの PDF ビューアに設定してください。
ハードウェア要件	・ディスプレイ解像度 1024 × 768 以上
CPU	・最低 2GHz 以上のクロックの CPU (マルチコア CPU を推奨)
メモリ	・最低 4GB 以上

- PDF 化した書類を印刷する場合は、ファイルに一度保存後、PDF ビューアで表示して印刷してください。
  PDF 化した書類をブラウザで表示した状態での印刷はサポート対象外です。
- ブラウザの表示の拡大率を 100%以外に設定した場合、画面レイアウトが乱れる場合がありますので、100%以外の拡大率で利用する際は制限事項がある点をご了承ください。
- セキュリティ上、リファラ（参照元）が有効で無いとフォーム描画に必要なモジュールがロードできないようになっています。セキュリティソフト、ファイアウォール、プロキシ等でリファラが無効化されている場合は有効にする必要があります。

2.2. クライアント動作環境（管理サイト）

項目	バージョン／スペック
対応 OS	クライアント動作環境（ユーザーサイト）と同様 ※MacOS、iOS、iPadOS、Android は除く
対応 Web ブラウザ	
Web ブラウザの設定	
ハードウェア要件	
CPU	・最低 2GHz 以上のクロックの CPU (4 コア以上を推奨)
メモリ	・最低 8GB 以上

X-WebForm、FlowEditor を利用する端末では、JDK の用意などが必要となります。
フォームや回付ルールを作成、変更する端末の利用条件については、以下をご確認ください。

X-WebFormについて

- クライアント端末に JDK 8 (OracleJDK/LibericaJDK) がインストールされている必要があります。
- X-WebForm のインストーラに JDK (LibericaJDK) が同梱されているため、X-WebForm のインストールと併せてインストールしてください。
- Oracle 社のサイトから JDK のインストーラをダウンロードして利用する場合、バージョンは 8 の update40 以降を利用してください。

FlowEditorについて

- Java をインストールする必要があるため、環境変数と.jnlp ファイルの規定のプログラムが変更されます。
  利用端末にて影響がないことをご確認の上、ご利用ください。変更点は下記の表をご参照ください。

- FlowEditor はリファラ（参照元）が有効で無いとアクセスできません。セキュリティソフト、ファイアウォール、プロキシ等でリファラが無効化されている場合は有効にする必要があります。

- FlowEditor は認証が必要なプロキシを経由して利用することはできません。
  FlowEditor を起動する場合は認証が必要なプロキシを経由せずに管理サイトへ接続するなどの回避をお願いします。

- AP サーバーを SSL 化している場合、利用している証明書に FlowEditor、または Java が対応していない場合があります。対応していない場合、FlowEditor を起動することが出来ません。
  そのため証明書を変更される、または FlowEditor が利用する Java を変更する場合は事前に検証を行ってください。
  サポートサイト(FAQ00373）もご参考ください。

- FlowEditor を起動する方法は「Windows アプリケーション版」と「JavaWebStart 版」2 通りあります。
  以下のように利用環境が異なりますので、ご確認の上どちらを利用するか選択してください。

- プロキシの設定箇所が起動方法によって異なります。
  それぞれの設定箇所にて対応可能な範囲でのみプロキシを経由して FlowEditor を利用することができます。
  そのため、プロキシを経由する必要のある環境では事前に検証し、「プロキシを経由した利用が行えるのか」「どちらの起動方法で対応できるのか」をご判断ください。

▼FlowEditor 起動方法による差

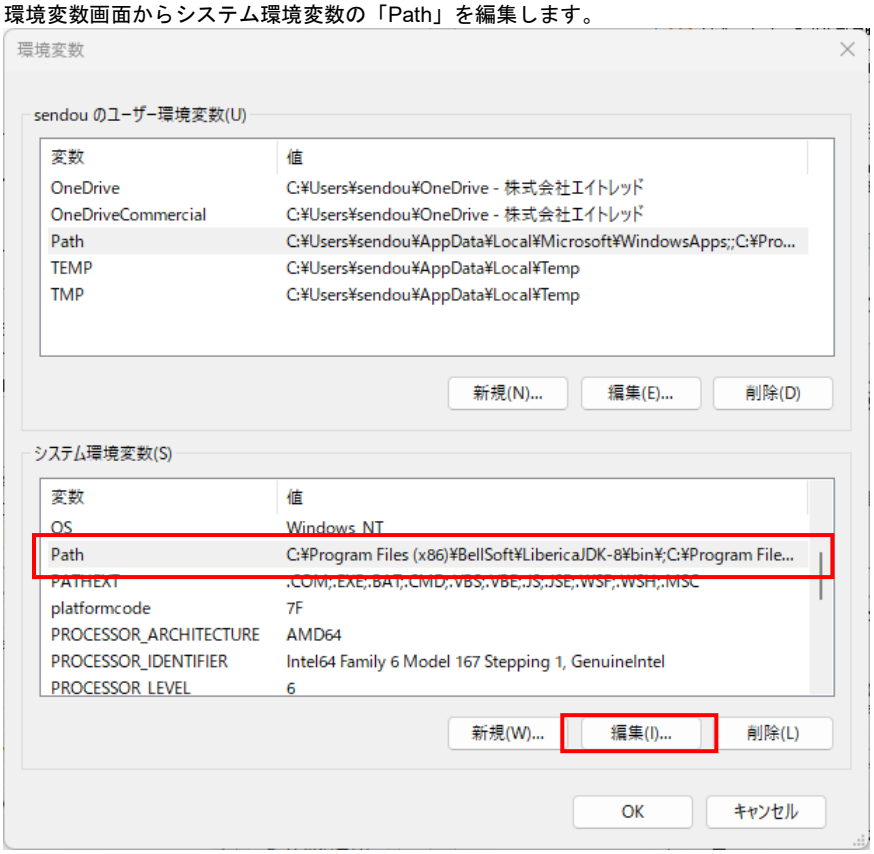
	Windows アプリケーション版	JavaWebStart 版
AgileWorks	R2.11 ～ R2.13、R3.0 ～ R3.3	R2.1 ～ R2.13、R3.0 ～ R3.3
起動時の操作	管理サイトからの操作	管理サイトからの操作
利用端末での準備	1)Windows アプリケーション版 FlowEditor のインストール 2)Liberica JDK のインストール	Oracle JDK のインストール
セキュリティ確認(※)	なし	あり
Java	Liberica JDK 11.0.6	Oracle JDK 8 （u211 以降は Oracle 社との 有償サポートが必須）
Java の環境変数	「JAVA_HOME」「PATH」に Liberica JDK がセットされます。	「JAVA_HOME」「PATH」に Oracle JDK がセットされます。
JavaWebStart と .jnlp ファイルの扱い	FlowEditor に固定されます。	OracleJDK の javaws.exe が 起動します。
プロキシ設定	Liberica JDK の「net.properties」 に設定します。 ・設定ファイルの場所 {LibericaJDK インストール先}¥conf¥ ・記述方式 http.proxyHost=プロキシホスト名 http.proxyPort=プロキシポート番号	Windows システムプロキシの ホスト名とポート番号が 読み込まれます。

※「FlowEditor の起動時に警告メッセージが表示される」

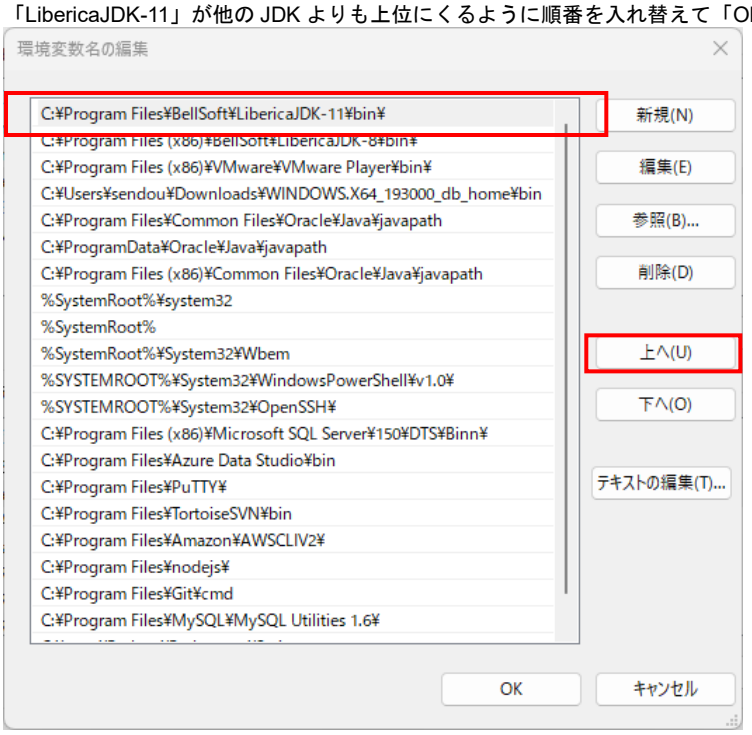
- JavaWebStart 版を利用する場合
  - Oracle JDK 8 をダウンロードし、インストールしてください。
  - 既に Oracle JDK 11 以降がインストールされている端末の場合でも、Oracle JDK 8 のインストールが必要です。
    既存の Oracle JDK 11 以降をアンインストールする必要はありません。
  - Oracle JDK をインストールする際には、オプション機能の「公開 JRE」を必ずインストールしてください。
  - FlowEditor を利用する場合は、Java の一時ファイルを保存するように設定してください。
    この設定を行わないと、FlowEditor 起動時に以下のエラーが発生する場合があります。
    「commons-httpclient-3.1.jar に署名されていないエントリがみつかりました。」

    【Java 一時ファイル設定箇所】
    利用端末 > コントロールパネル > Java > インターネット一時ファイル > 設定
    → 「コンピュータに一時ファイルを保持する」のチェックが外れていないことを確認
  - JavaWebStart 版 FlowEditor は以下の注意事項をご確認の上、ご利用ください。
    「Java に関する注意事項」

- Windows アプリケーション版を利用する場合
  - サポートサイトのダウンロードページより Windows アプリケーション FlowEditor をダウンロードし、インストールしてください。
  - インストールの手順は別紙「Windows アプリケーション版 FlowEditor インストールガイド」をご確認ください。
  - 利用可能な JDK は「LibericaJDK-11」のみです。LibericaJDK の他のバージョンでは動作保証していません。
  - 同じ端末に X-WebForm などで LibericaJDK をインストールしている場合、Windows アプリケーション版 FlowEditor が利用する Liberica JDK 11 が優先利用されるように設定を行ってください。
    - 環境変数画面からシステム環境変数の「Path」を編集します。



    - 「LibericaJDK-11」が他の JDK よりも上位にくるように順番を入れ替えて「OK」で保存します。



    - この手順はバージョンに関わらず「LibericaJDK」をインストールした後に実施してください。

3. Javaに関する注意事項

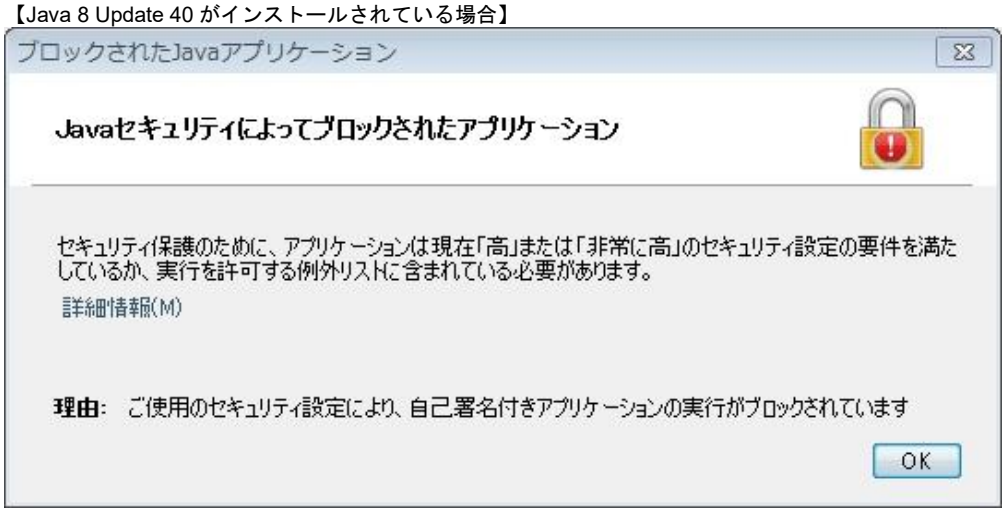
Java8 の一部のバージョンにて以下の問題が確認されており、JavaWebStart 版 FlowEditor の利用に影響があるため、ご確認ください。

以下、当マニュアル執筆時点の状況を元にした記述です。
Java のアップデートリリースがあった場合、動作が変わる可能性があります。
最新の情報は、サポートサイトをご確認頂くか、AgileWorks を購入された代理店様までお問い合わせください。

3.1. FlowEditor が起動できない

Java 8 Update40 以降では Java のセキュリティ機能によりアプリケーションの実行がブロックされます。
その為、JavaWebStart 版 FlowEditor を起動すると、下記の警告が表示され、アプリケーションが起動できません。

【Java 8 Update 40 がインストールされている場合】

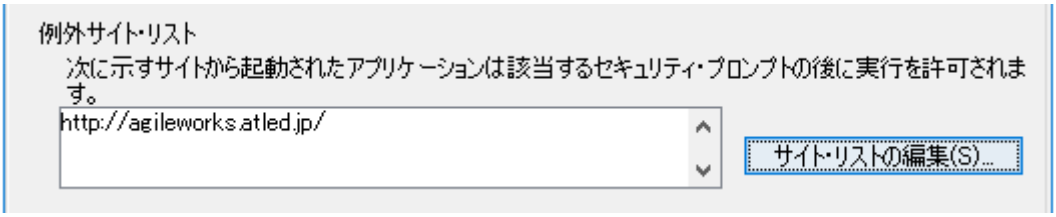


【警告が表示された際の対処】
Java コントロール・パネルのセキュリティ設定を変更する事で回避可能です。

1)コントロールパネル＞Java コントロール・パネル＞セキュリティ

2)「サイト・リストの編集」(※)をクリックして、AgileWorks の URL をホスト名まで登録します。
※なお本ボタンの名称は Java8 Update40 で確認した名称です。

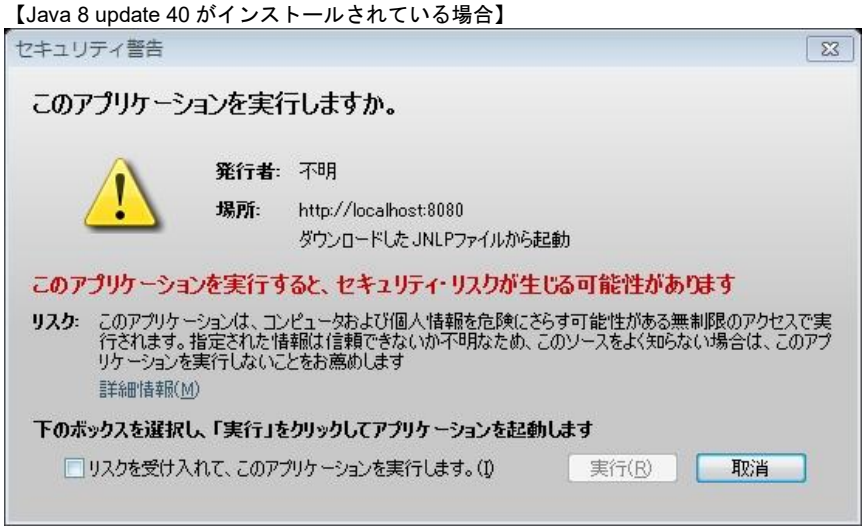
例) http://agileworks.atled.jp/AgileWorks/Broker/Picus の場合
→ http://agileworks.atled.jp/



3.2. JavaWebStart 版 FlowEditor の起動時に警告メッセージが表示される

Java 8 Update 40 以降では、ユーザーが署名なしのアプリケーションを実行するたびに
「リスクを受け入れて、このアプリケーションを実行します。」オプションを選択する必要があります。
その為、JavaWebStart 版 FlowEditor を起動すると、毎回下記の警告が表示されます。

【Java 8 update 40 がインストールされている場合】



【警告が表示された際の対処】
JavaWebStart 版を利用する場合、表示されないようにするための有効な回避策はありませんが、製品動作上の問題はありません。

該当の警告が表示された場合には、警告画面にある「リスクを受け入れて、このアプリケーションを実行します。」のチェックボックスにチェックいただき、「実行」ボタンにて FlowEditor をご利用ください。

該当の警告を表示させたくない場合、Windows アプリケーション版 FlowEditor のご利用をご検討ください。（FlowEditor について）

4. AgileWorksモジュール構成

4.1. 構成の概要

AgileWorks を導入すると、以下のモジュール／ミドルウェア／DB 領域がインストールされます。

▼ AgileWorks 標準パッケージのモジュール

モジュール／ミドルウェア	説明
AgileWorks 本体	AgileWorks 本体です。 AP サーバー上にデプロイされるモジュールです。
AgileWorks ジョブマネージャ	AgileWorks 本体と非同期で動作するバッチ実行エンジンです。 ▼ AP サーバー1 台の場合 AgileWorks 本体と同一プロセスで動かします。 「外部ジョブマネージャ」として単独インストールする必要はありません。 ▼ AP サーバー複数台の場合 AgileWorks 本体と別プロセスで動かす必要があります。 どこか 1 台の AP サーバーで動作させるか、DB サーバー上で動作させるか、専用サーバーを立てて動作させるか検討する必要があります。 ※ 当該プロセスの推奨メモリ（Java ヒープサイズ）は、最低 512MB／推奨 1024MB 以上です。
AgileWorks メールサービス	AgileWorks の各種通知メールをキューイングして、定期的にメールサーバーへ送信するプロセスです。通知メールはワークフロー上のイベントとは非同期に動作して一定間隔(デフォルト設定)でキューイング分をまとめ実行する機構となっています。 ▼ AP サーバー1 台の場合 AgileWorks 本体と同一プロセスで動かします。 「外部メールサービス」として単独インストールする必要はありません。 ▼ AP サーバー複数台の場合 AgileWorks 本体と別プロセスで動かす必要があります。 どこか 1 台の AP サーバーで動作させるか、DB サーバー上で動作させるか、専用サーバーを立てて動作させるか検討する必要があります。 ※当該プロセスの推奨メモリ（Java ヒープサイズ）は、最低 256MB／推奨 512MB です。 尚、メールサービスとは、SMTP サーバーではありませんので、メール通知機能を利用するには、別途、SMTP サーバーを用意する必要があります。

▼ AgileWorks データベース領域

領域	説明
AgileWorks システム領域	AgileWorks パッケージ機能が利用するデータベース領域です。
外部マスタ領域	標準マスタと外部マスタが格納される領域です。 この領域に対しては、データベースへの直接アクセスが許可されていますが、標準マスタのデータに関しては制限があります。 詳細は別紙「Aw12-標準マスタガイド」を参照ください。

▼ AgileWorks アドオンランタイム利用時のモジュール

モジュール／ミドルウェア	説明
AgileWorks Service Bus (ASB)	AgileWorks 向けに特化された外部システムとのデータ連携やサービス連携を行なう為の ESB。（エンタープライズサービスバス） AgileWorks 本体と同期または非同期で動作するミドルウェアとして導入します。 ※当該プロセスの推奨メモリは、最低 768MB／推奨 2048MB です。 外部システムとのデータ連携、BPM 業務での利用が多いケースでは、単独サーバーを用意する事を推奨します。

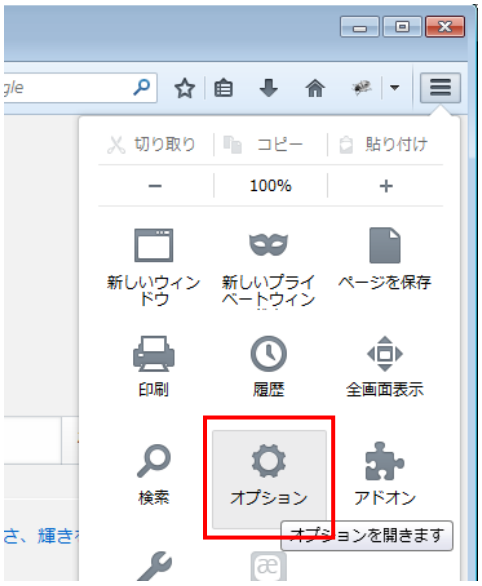
5. PDFビューアの設定

ブラウザのデフォルトの PDF ビューアを Adobe Reader に設定する方法を説明します。

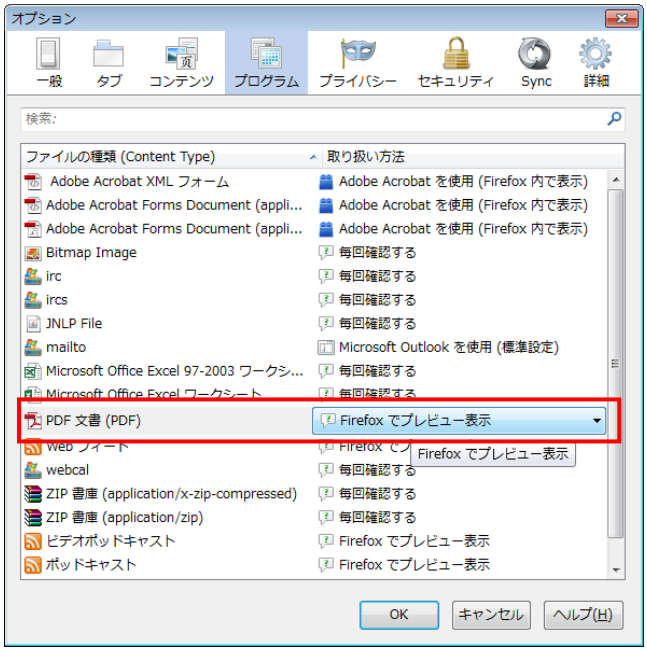
5.1. Firefox の PDF ビューアを Adobe Reader に変更する方法

書類の PDF 表示の際に Firefox 内蔵の PDF ビューアではなく Adobe Reader が起動するように設定します。
※本書は Firefox のバージョン 33 を例に説明しています。
　バージョン 33 以外をご利用の場合は適時読み替えてください。

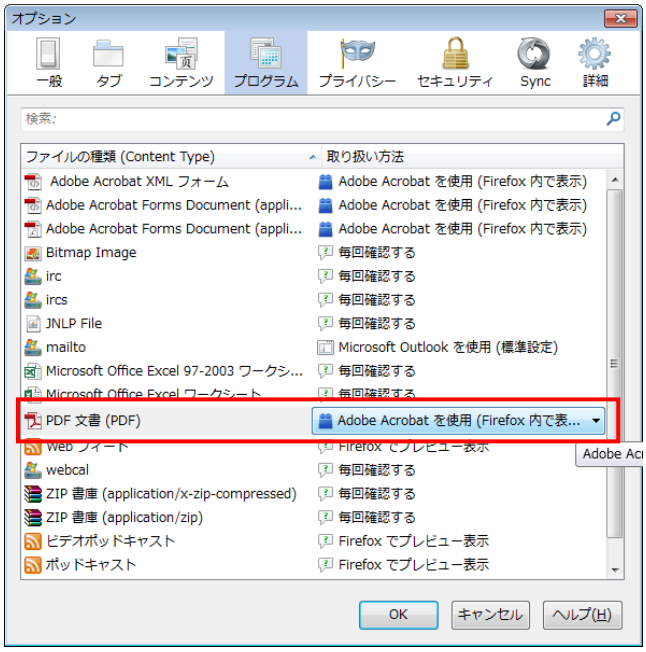
1)　Firefox のメニューから「オプション」を選択します。



2)　オプション画面が開いたら「プログラム」という項目を選択し、一覧から「PDF 文書(PDF)」の設定欄を探します。



3)　取り扱い方法を「Adobe Acrobat を使用 (Firefox 内で表示)」に変更し、「ＯＫ」をクリックします。
※Firefox の再起動は必要ありません。



4)　任意の書類を PDF 表示し、Adobe Reader が起動していることを確認します。

5.2.　Google Chrome の PDF ビューアを Adobe Reader に変更する方法

書類の PDF 表示の際に、Google Chrome の内蔵 PDF ビューアではなく、直接 Adobe Reader が起動する設定はできないため、下記の方法で画面から表示を切り替えるか、PDF ファイルをダウンロードしてから開いてください。
※Google Chrome のバージョン 145 を例に説明しています。バージョン 145 以外をご利用の場合は設定方法が説明と異なる場合がありますので、その時は各バージョンのマニュアルを参照してください。

Adobe Reader Chromeアドオンを利用する方法

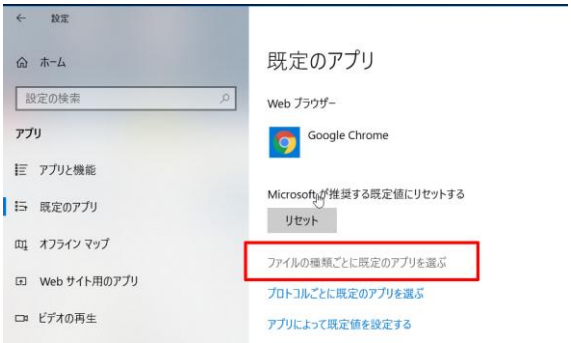
書類の PDF 表示の際に Google Chrome 内蔵の PDF ビューアではなく Adobe Reader Chrome アドオンで表示を行います。
1)　あらかじめ Chrome ウェブストアから Adobe Reader Chrome アドオンをインストールしてください。
2)　Google Chrome 内蔵の PDF ビューアで表示後、右下の「Acrobat で開く」をクリックします。

Adobe Readerを既定のアプリとしてPDFを表示する

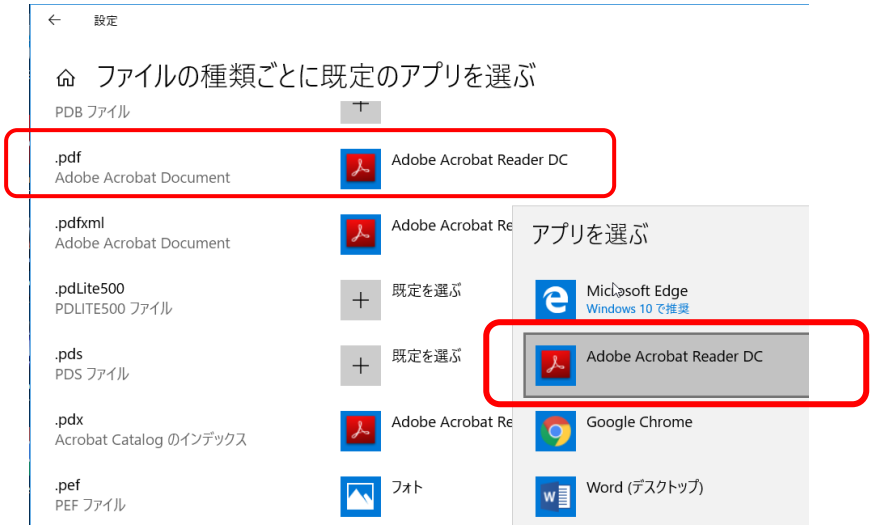
書類の PDF 表示の際に、Google Chrome の内蔵 PDF ビューアではなく、下記の方法で PDF ファイルをダウンロードしてから開いてください。

1)　PDF ファイルの「既定のアプリ」に「Acrobat Reader」を指定します。

①　Windows メニューから「設定」→「アプリ」→「既定のアプリ」をクリックします。
「ファイルの種類ごとに既定のアプリを選ぶ」を選択します。



② （拡張子）ファイル一覧の中から PDF を選択し、現在設定されているアプリ(Microsoft Edge)をクリックして「Adobe Acrobat Reader DC」に変更します。



2) PDF ファイルを Google Chrome の内蔵 PDF ビューアではなくダウンロードするように設定します。

① ブラウザのハンバーガーメニューから「設定」を開いてください。
② 「プライバシーとセキュリティ」→「サイトの設定」をクリックします。
③ 「コンテンツ」→「その他のコンテンツ」→「PDF ドキュメント」をクリックします。
④ 「Chrome で PDF を開く」から「PDF をダウンロードする」をクリックします。

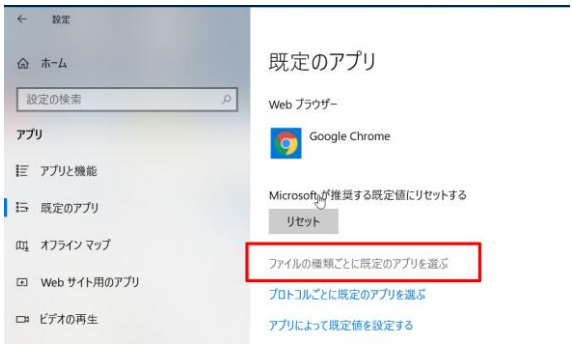
3) 上記設定が出来ている状態で、PDF をダウンロードして開きます

5.3. Microsoft Edge の PDF ビューア表示における注意点

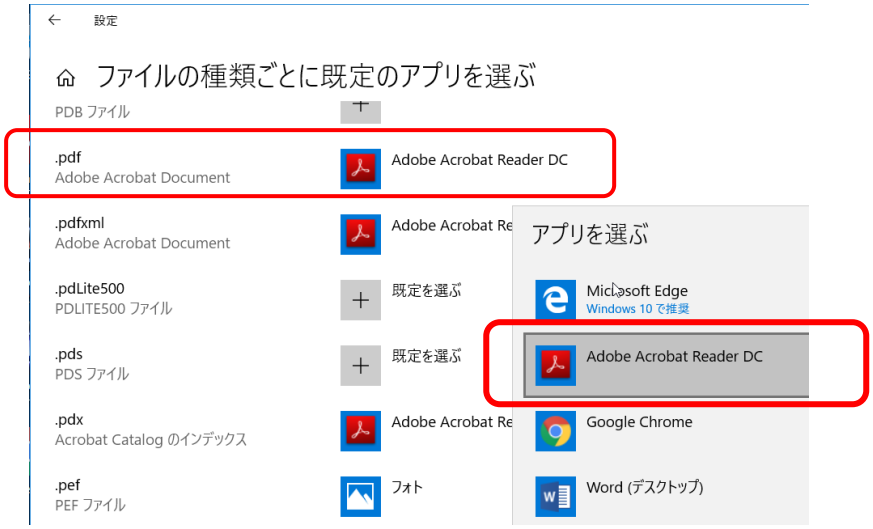
書類の PDF 表示の際に、MicfosoftEdge の内蔵 PDF ビューアではなく、直接 Adobe Reader が起動する設定はできないため、下記の方法で PDF ファイルをダウンロードしてから開いてください。

1) PDF ファイルの「既定のアプリ」に「Acrobat Reader」を指定します。

① Windows メニューから「設定」→「アプリ」→「既定のアプリ」をクリックします。
② 「ファイルの種類ごとに既定のアプリを選ぶ」を選択します。

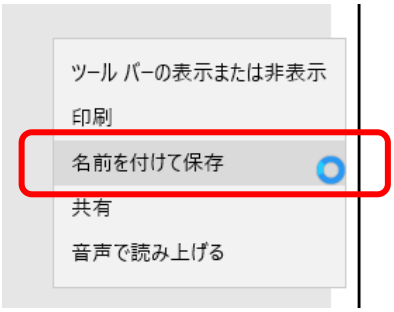


③　（拡張子）ファイル一覧の中から PDF を選択し、現在設定されているアプリ(Microsoft Edge)をクリックして「Adobe Acrobat Reader DC」に変更します。



2)　上記設定が出来ている状態で、PDF をダウンロードして開きます。

①　Edge 内蔵の PDF ビューアで表示された PDF を右クリック→「名前を付けて保存」を選択します。



②　保存が完了したら「開く」を選択するか、
エクスプローラーから保存した PDF ファイルをダブルクリックします。